

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：32612  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2017～2023  
課題番号：17K02517  
研究課題名（和文）Ageing, Dementia, Care in Contemporary Fiction

研究課題名（英文）Ageing, Dementia, Care in Contemporary Fiction

## 研究代表者

迫 桂 (SAKO, Katsura)

慶應義塾大学・経済学部（日吉）・教授

研究者番号：60548262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：エイジングや認知症の文化的意味、及び、文学がその意味形成に果たす役割についての知識を発展させた。主に英語文学・文化的語りから伺えるエイジングや認知症の言説・表象を分析し、これらのもつ差別的な面の根底には、生産・自立・理性を重視する人間主体像や時間観があることを示し、これらの規範的思想をフェミニスト倫理学の視点から見直した。多様な生の在り方を包容する社会実現には、人間主体と他者との関係性を見直す必要があることを明らかにした。  
多様なジャンルのテキストを対象に、語りの形式と働き、生産・受容背景を含めて分析を行うことで、テキストがエイジングや認知症の言説生産・流通に作用する様をより正確に理解できた。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、エイジングや認知症の文化言説・表象研究を、より大きな思想、文化、政治的議論に結びつけたこと、様々なジャンルと媒体のテキストを研究対象としたことである。この結果、生産・自立・理性を重視する人間主体像や時間観が、エイジングや病いに対する忌避を生み、不平等な社会関係を(再)生産する傾向とその過程を示すことができた。一方、日英児童絵本の比較研究では、他者との関係性を重視する傾向が世代間ケアを保障する一方、個の自由を制限する可能性も確認された。多様な生の在り方に開かれた社会の実現に、倫理的思想が不可欠であることが改めて明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The project has contributed to the understanding of the cultural meanings of ageing and dementia and the role of literature in (re-)producing these meanings. Exploring the discourses and representations of ageing and dementia in literary and cultural narratives, it has shown that these often discriminatory discourses are underpinned by the normative conceptions of the human subject and time that privilege production, independence and rationality. Re-examining these conceptions from the perspective of feminist ethics, it has suggested that they need to be revised in order to acknowledge our relationality and achieve a more inclusive society that accommodates different subjectivities, bodies and life courses. Finally, by considering texts from different genres and their narrative forms as well as cultural and historical contexts, the project has brought into focus specific ways in which literary texts can make impact in the discourses of ageing and dementia.

研究分野：人文学

キーワード：ageing dementia gender care narrative fiction film picturebooks

## 1. 研究開始当初の背景

世界的な人口高齢化は政治経済、社会・福祉制度、個人生活に多様で重要な影響を及ぼしている。これに応じて、ジェロントロジー研究は従来の医学、社会政策・福祉分野を超え、人文学分野を含む複数の学問領域で活発化している。人文学分野で特徴的なのは、年齢(エイジ)をアイデンティティーの一要素とみなし、エイジングをライフコースの視点から捉える「エイジング(エイジ)・スタディーズ」が発展していることである。認知症の研究も、エイジング・スタディーズの重要な一領域となっている。

エイジングに対する社会的関心が高まる一方で、エイジングの文化的言説については、その否定的な意味合いが問題視されている。現代文化には若さを崇拝する、「若さ・エイジング」の対立項が内在し、「エイジング=衰退」の考え方が支配的といわれる。さらに、新自由主義が浸透した多くの高齢化社会においては、「エイジング=介護(費用)負担増」とみなす「負担」言説も強まっている。この傾向は、社会福祉が削減され、人口の多くが負の影響を受けている社会において特に顕著だと言われている。

認知症の文化的言説も同様に差別的な意味合いが強い。特に、認知症と記憶力低下が過度に関連づけられ、「自己の喪失(loss of self)」の意味が強調される傾向が指摘されている。また、健康な老年が賞賛される一方で、認知症を‘pathological’ ageing として‘normal’ ageing と区別する見方を生んだとされる。その結果、患者及び介護者として認知症を経験する人口が増え、社会認識が向上する一方、認知症に対する忌避感情が残り、認知症の症状をもつ人を他者と見なす文化傾向が問題視されている。

以上から、エイジングや認知症に対する関心が高まっている一方で、画一的で差別的な考え方が存在しており、より複層的で倫理的な理解が必要とされている。

## 2. 研究の目的

上述の状況を踏まえ、本課題の大きな目的は、エイジングの言説・表象研究をより大きな思想、文化、政治的議論に結びつけることであった。特に、feminist ethics に注目して、エイジングや認知症の言説が内包する思想体系を問い直すことを目指した。また、エイジング研究の対象が専ら現代の欧米圏に限定されている状況を是正するため、分析対象とする第一次資料をジャンル、文化圏の点から拡大することも目的の一つであった。さらに、テキストの語りの形式、生産・受容背景を考慮して、表象の意味解釈を行うことで、文学がエイジングや認知症の意味生成に作用する様をより正確に理解することも目的とした。

具体的には、下記の視点を基盤に研究を構想、遂行した。

(1) 認知症言説を変えるには、認知症者の主体性の表現を求めるだけでなく、その土台にある規範的概念を問い直し、複雑な個人・社会関係の中で subjectivity と agency をとらえることが不可欠である。例えば、「自己の喪失 (loss of self)」の意味を変えるには、主体を agency, autonomy, logical reason, health を有する個人とみなす規範概念を見直す必要がある。

(2) 上記と関連し、認知症後期には介護が必然となることから、認知症の経験の全体像をつかむには、介護関係、特にその倫理性と社会性を認識する必要がある。つまり、介護関係の従来観を形成する subject/object; the carer/the cared-for; independence/dependency の二項対立を問い直し、主体性は relational なものととらえ、介護を intersubjective な空間と理解すべきである。また、介護は文化的実践であり、その意味と経験は、ジェンダーを主とする文化規範、社会制度等が複層的に絡み合って形成されている。

(3) 介護を含む広義のケアの倫理思想は、エイジングのみならず、病いや障害などに対する偏見や差別を見直すのに有効である。これは、新自由主義と資本主義の影響が広範な現代社会において特に有意義で、自立、健康体、生産性に価値を置く ableism や個人の身体を政治的物体化する biopolitics を問い直し、多様な生の在り方に目を向けることが可能になると期待される。

(4) 時間と主体性の関係についての一般的な考え方も、エイジングと認知症の言説を形成する要素のひとつである。近代産業生産に適した、時間を直進的な chronological movement とする見方は、エイジングや認知症を直進的な衰退とする見方、認知症者を規範的な時間秩序を逸脱した他者とみなす傾向を助長しているとみられる。主体性と時間の関係の多様性を認めることは、画一的なライフコース観を見直し、エイジングの意味を新たにすることが可能になっている。

(5) Literary fiction だけでなく、genre fiction の認知症の語りが増えている。また、認知症

が中心主題でなく、プロット装置や寓話・比喩的機能を担う例が増えている。認知症が現代文化でどのように想像され、読まれているか、を知る手がかりとして、また、認知症と語りの相関関係について考える材料として、これら新しいタイプの語りの研究が今後有意義である。

(6)エイジング研究の今後の課題として、対象が現代と欧米の文化圏に偏っていることが挙げられる。既存の学術的議論や理論の有効性を検証し、エイジングの文化的構性の考察を深めるうえで、対象を多様化し、比較の視点を取り込むことが有益と思われる。

### 3. 研究の方法

2で挙げた目的達成のために、下記の具体的な研究課題に取り組んだ。

- (1) 認知症の文学的語り
- (2) 認知症の文化的語り
- (3) 児童向け絵本におけるエイジング、ケア、世代
- (4) 現代文学におけるエイジング、ジェンダー、`ケア

全課題において、テキスト分析を基本的な考察方法とし、多様なジャンル、媒体の語りを対象とした。英語テキストに加え、少数ではあるが日本のテキストも扱うことで、比較的視点の導入を試みた。言説の生産過程、及び、文学的特性の作用をより正確に理解するため、語りの形式、生産受容の文脈も考慮して総合的に意味解釈を行った。

### 4. 研究成果

#### 課題1

国外の共同研究者と、認知症を描いた欧米圏と日本の現代文学テキストを読解し、エイジングと認知症の表象・言説の批評を行った。主に以下の視点から分析を行った。

- (1) 認知症の主体がいかに描かれているか、語られているか。例えば、他者化されているか。テキストは「自己喪失」の意味を喚起しているか、覆しているか、書き直しているか。
- (2) 介護者と被介護者のケアの関係はどのように描かれているか。認知症の被介護者の主体性に目が向けられているか、どのように描かれているか。
- (3) 認知症とケアの表象において、近代的な規則的時間観がどのような意味をもっているか。

上記視点から、多様なジャンルのテキスト(chick lit、回想記、グラフィック・フィクション、推理小説、家族小説、児童絵本)を分析した結果、ジャンルや語り形式などの文学的特性が、エイジング、認知症とケアの表象・意味形成に大きな影響を与えることが確認できた。

例えば、推理小説において、認知症の登場人物が導入される場合が増えている。これにより、認知症に対する認知度が上がる可能性はあるが、差別を助長する危険性もはらんでいる。例えば、認知症の老年の人物が、事件解決のカギを握っているが、認知症のために肝心の情報が得られない、という筋立てがよくつかわれる。このような設定は、「認知症=記憶・自己喪失」の意味合いを強化してしまう危険がある。また、認知症の人物が一人称の語り手である場合は、読者が認知症の経験を主体的な視点から疑似体験する意味合いがあり、認知症の人に対するエンパシーをもたらす効果があるかもしれない。しかし、謎を深めるための装置として使われている面は否定できず、「自己喪失」の意味合いを深める可能性もある。

Chick litと称されるジャンル小説においては、認知症介護が30~40代女性の自己成長と家族再生の語りにも織り込まれている例が認められた。この背景には、新自由主義文化とポストフェミニズム文化において、自己啓発と「家族」が規範的価値となっている状況があると考えられた。

#### 課題2

(1)日本の認知症文学の現状を調査した。欧米と比較し、認知症テキストのジャンルやメディアが多様なこと、特に、ポピュラー・テキスト(TVドラマや漫画シリーズ)の存在感が相対的に高いことが認められた。研究成果を国外の出版物に発表した。

(2)映画は認知症の文化的意味形成に重要な役割を担うと考えられる。そこで、日本の現代商業映画作品における認知症の表現を分析し、日本の介護制度・文化や、親族・社会関係の在り方の影響を考察した。人間主体を理性的個体と理解する西洋文化圏では、「認知症」=「自己の喪失」という意味合いが強いことが問題視されている。しかし、分析作品ではそれが希薄であり、自己の身体性を重要視する面が強いことを、認知症と(都市・田舎)空間の関係の描かれ方から明らかにした。このように、分析作品には、西洋文化圏と異なる認知症の表象が認められるが、作品の年代を踏まえると、その表象に変化があることが明らかになった。具体的には、認知症の人の主体的視点への意識が強くなり、その人を他者化する傾向が薄れている一方で、「認知症」

= 記憶・自己の喪失」の意味付けが強くなっている傾向が伺えた。同時に、家族介護の理想化は継続するものの、男性介護者が登場し、家族介護のジェンダー規範の変化の兆しとも解釈できた。研究成果は、出版発表した。

### 課題 3

本課題は主に国際共同研究加速基金（課題番号 17KK0030）の課題として遂行した。認知症の人の増加につれて、子供に認知症について教えることを目的とする児童文学テキストの出版が続いている。児童文学ジャンルの特性は子供の読者を想定して、大人が作る点にある。つまり、大人の思想や価値観を子どもに伝える意味合いをもち、子供の社会化の役割を担っている部分が多い。特に、児童絵本は年齢の小さい子供に向けて生産されており、この役割は大きいといえる。しかし一方で、絵本という媒体の特性（視覚と言語の相関）が、大人が意図する支配的意味を複雑化し、曖昧性を生み出す力があるという研究者の指摘もある。よって、認知症についての児童絵本は、認知症、エイジング、ケアの文化言説の一部であると同時に、これを生産、再生産、または、変容させる潜在性を持っている。

このようなジャンルと媒体の特性に留意しながら、主に 2000 年以降に出版された日英児童絵本を比較分析した。この結果、認知症の人の「自己」、家族介護や世代の関係性の描かれ方において、日英で差が認められる例があった。この背景には、人間主体の自己と他者についての文化的差異があるかもしれない。

### 課題 4

(1) 英国女性作家の二人、Doris Lessing と Margaret Drabble の小説作品をエイジング、ケア、ジェンダーの視点から読んだ。特に Lessing 作 *The Diary of a Good Neighbour* (1983) と Drabble 作 *The Pure Gold Baby* (2013) に焦点を当て、サッチャー政権時代、新自由主義が浸透した現在のイギリス、というそれぞれの時代背景を踏まえつつ、エイジングとケアがどう描かれているか、さらに、それが問題提起するものを考察した。その結果、両作品が、エイジングの「衰退」言説の再考を促し、ケアの倫理的・社会的意義を強調していることを示した。同時に、時代背景を反映しているとも解釈できる違いも認められた。Lessing 作品は、男性中心の資本主義経済社会を支える直線的で規則的な時間を批判し、排除されがちな女性の時間・空間、特にケアを前景化している。しかし、この支配的時間を批判的に描く一方で、それを脱中心化しようという姿勢はみられない。一方で Drabble 作品は、この支配的時間の問い直しを迫り、それとは異なる 進歩と成長を規範としない 時間を探求している面が明らかである。

(2) Michele Roberts 作 *The Walworth Beauty* (2017) を対象に、エイジング、ジェンダー、空間の関係について国際共同研究を行った。本作品は、男性と関連づけられる都市空間の遊歩者 (flânerie) の伝統を書き直し、都市空間における共同体の可能性や女性の主体性を想像することで、女性のエイジングの経験に、「衰退」の意を超える、新たな意味合いを加えていることが分かった。成果は国際学会で口頭発表した。

(3) TV ドラマを題材に、エイジング、ジェンダー、友情 (friendship) についての国際共同研究を行った。多くの社会で公的福祉が削減される中、自立していないと見なされる主体 (介護・福祉サービス受給者など) に否定的な文化傾向が問題視されている。また、家族介護の限界が指摘され、血縁を超えた友人関係が老年期にどのような役割を果たしうるかという問いが重要になっている。ケアは伝統的にジェンダーの問題であるため、老年期の女性にとって、友情は社会的に大事な意味合いをもっているといえる。

以上を踏まえ、公共政策や文化空間における friendship 言説・表象研究、老年学分野の friendship 研究の文献調査を行った。これらを念頭に、老年期の女性主人公二人の「友情」を主題とする TV ドラマ・シリーズの一作品 (アメリカ) 分析をした。その結果、作品内で自立を失うリスクがしばしば前景化して描かれる一方、そのリスクを回避し、自立した個人としての主体性を維持するための手段として「友情」が位置されていることが明らかになった。このような、一見すると楽観的であるが、根底にアンチ・エイジングの視点を包摂する語りの背景には、商業文化空間で消費される TV ドラマという媒体が抱える制約もあるといえる。最終的な成果は学術雑誌に出版された。

(4) 老年期の経験や意味の形成要素としてジェンダーが認識されているが、先行研究の多くは女性と femininity に注目したものである。これを踏まえ、国外研究者と共同でエイジングと masculinity について研究を行った。分析テキストには、英国の TV ドラマ・シリーズ作品を選定した。これは、三世代を中心に展開する家族ドラマで、主要登場人物の一人が父・祖父である。この人物表象を主たる分析対象とし、ageing masculinity について、現在問題視されてい

る toxic masculinity と比較対照しつつ、考察した。その結果、masculinity の言説と老いの言説が接合することで、toxic masculinity とは異なる ageing masculinity が描かれうることが分かった。例えば、masculinity は力(power)(身体的強さ、社会的地位など)と結び付けられ、エイジングはこの力を弱め、否定するものとする文化的傾向がある。本作においては、他者へのケアが ageing masculinity の重要な一部分として表現されており、他者に対する優越性を核とする masculinity とは異なる masculinity のモデルを示唆していた。成果を論文としてまとめ、出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Katsura Sako and Maricel Oro-Piqueras	4. 巻 65
2. 論文標題 Successful ageing and the spectre of the fourth age in the Netflix TV series Grace and Frankie	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Aging Studies	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jaging.2023.101113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Elizabeth F. Caldwell, Sarah Falcus and Katsura Sako	4. 巻 52
2. 論文標題 Depicting Dementia: Representations of Cognitive Health and Illness in Ten Picturebooks for Children	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Children's Literature in Education	6. 最初と最後の頁 106-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10583-020-09405-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Maricel Oro-Piqueras and Katsura Sako
2. 発表標題 Late-life Friendship in Grace and Frankie: Changing Relationship Paradigms in Old Age?
3. 学会等名 Discourses of Fictional (Digital) TV Series Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katsura Sako
2. 発表標題 Family and Nostalgia in Contemporary Japanese Film about Dementia
3. 学会等名 North American Network in Aging Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Katsura Sako
2. 発表標題 Dementia in Japanese Children's Picturebooks
3. 学会等名 Contemporary Women's Writing Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sarah Falcus and Katsura Sako
2. 発表標題 Dementia and Generational Time in Contemporary Fiction in English
3. 学会等名 The 3rd Conference of European Network in Aging Studies (ENAS) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Katsura Sako
2. 発表標題 Dementia in Children's Picturebooks
3. 学会等名 Dementia and Cultural Narrative Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sarah Falcus and Katsura Sako
2. 発表標題 Reimagining Flanerie in The Walworth Beauty
3. 学会等名 Reading Michele Roberts (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sarah Falcus and Katsura Sako
2. 発表標題 Dementia and Generational Time in Kirsty Wark's <i>The Legacy of Elizabeth Pringle</i> (2014) and Adele Parks' <i>Whatever It Takes</i> (2012)
3. 学会等名 The 13th Conference of the European Society for the Study of English (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Katsura Sako	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 -
3. 書名 “Contemporary Narratives of Dementia in Japan.” In Paul Crawford and Paul Kadetz (eds), <i>The Palgrave Encyclopedia of Health Humanities</i> (pp. 1-8)	

1. 著者名 Katsura Sako	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Palgrave	5. 総ページ数 218
3. 書名 “Ageing and Care in Contemporary Women's Writing: Doris Lessing's <i>The Diary of a Good Neighbour</i> and Margaret Drabble's <i>The Pure Gold Baby</i> .” In Gina Wisker, Leanne Bibby and Heidi Yeandle (eds), <i>Legacies and Lifespans in Contemporary Women's Writing</i> (pp. 165-187)	

1. 著者名 Katsura Sako	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 480
3. 書名 “Dementia in Japanese Cinema: Family and Rural Nostalgia.” In Sarah Falcus, Heike Hartung and Raquel Medina (eds), <i>Bloomsbury Handbook of Ageing in Contemporary Literature and Film</i> (pp. 313-324)	



1. 著者名 Maricel Oro-Piqueras and Katsura Sako	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 306
3. 書名 "Good Old Men: Revising Ageing Masculinities in Last Tango in Halifax." In Sara Martin and M. Isabel Santaularia (eds), <i>Masculinity in Anglophone Literature and Culture: In Search of Good Men</i> (pp. 251-266)	

1. 著者名 Katsura Sako	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 5507
3. 書名 "Ageing and Detective Fiction." In: Gu D., Dupre M. (eds) <i>Encyclopedia of Gerontology and Population Aging</i> (pp. 163-164)	

1. 著者名 迫桂「ドリス・レスリング『夕映えの道 よき隣人の日記』」	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 460
3. 書名 高橋和久、丹治愛編著 『二〇世紀「英国」小説の展開』 (pp. 335-58)	

1. 著者名 迫桂「『黄金のノート』（ドリス・レスリング）」「20世紀後半～現代の文学：多様化する文学」	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 浦野 郁、奥村 沙矢香編著 『よくわかるイギリス文学史』 (pp. 172-173)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スペイン	University of Lleida			
英国	University of Huddersfield			